特　集：徳島県の医療と教育：その現在と未来

徳島市民病院の現状と今後

惣　中　康　秀
徳島市民病院院長

現　　状

徳島市民病院は急性期医療を担う地域の中核病院です。新病院となり，一般病床295床，回復期リハ病床を含め339床とスリム化し，５年が経過しております。経営状況も地方公営企業法全部適用となり平成22年度から安定化してきております。最近の数年間にて病院の機能も大きく変わってきました。地域医療支援病院，地域がん診療連携拠点病院，災害拠点病院，DMAT 指定病院，地域周産期母子医療センター，初期研修医基幹型病院などの認可をうけ，病院機能評価の認定も受けております。平均在院日数は10日前後となり，１日外来患者数も再来を減らすことで500人を切るようになりました。これによって外来待ち時間も減ってきました。

医療体制も変化してきており，病診連携を尊重したチーム医療を行い，地域完結型医療を目指しております。認定看護師も各分野におり，医師だけでなくコメディカルと協力してチーム医療のできる病院を目指しております。

初期研修医は市民病院基幹型と大学との連携の研修医がいますので常に10人前後の初期研修医がいる状態です。初期研修医の教育に関しても大学との連携を密にして全人的医療のできる医師を育てています。いままで基幹型の研修医は26名が無事終了し23名（88％）が徳島大学医局に所属し徳島の医師として活躍しています。

今　　後

徳島市内にはいくつかの病院があり，同じ形の医療をする病院は求められていません。市民病院の特徴は外科・整形外科・脳外科などの外科系の強い病院であり，産科・NICU の周産期医療も伝統的に強い病院です。この特徴を活かしていくことが市民病院の生き残る道と思われます。そこで市民病院には現在地域周産期母子医療センター，脊椎・人工関節センターがあります。市民病院の患者の内容で内科・外科にがん患者が多いという特徴もあり，国および県の第２期がん対策推進基本計画に基づいて，がん診療のさらなる充実強化をめざしがんセンター構想をたてました。がんセンター構想が実現すれば，病床も一部変更して緩和ケア病床（将来的には緩和ケア病棟）を作り，在宅診療にてかかりつけ医も困っている終末期患者を，最後までの見取りも可能となるように計画しております。この３つのセンターを柱にして，研修医の教育に関しても県内に初期並びに後期研修医が増えるように，大学との連携をさらに密にした計画をたてています。